

重厚なメロディーの隙間を埋めるバンド・アレンジ

『亡き王女のためのパヴァーヌ』 by Joseph-Maurice Ravel

テンポが遅いため、多くの音的空間が生まれるバラード。ゆったり淡々と流れる主旋律に対し、その裏で細かく刻まれるドラムや、隙間を埋めるようなベース・ラインがアレンジのポイントです。

『ボレロ』でもお馴染みのラヴェルが1899年に作曲した本曲。本来もゆったり演奏される『～パヴァーヌ』ですが、そこにベースとドラムが入るとしたら……そんな想像から始まったアレンジでしたので、本章でも採り上げた [12/8 拍子] を使い、バラード仕立てのタイトな演奏にしてみました。ちなみにこの楽譜上の付点4分音符が、原曲の8分音符に相当します。小節数がマチマチなので、ところどころドラム・フィルを入れたり、クラッシュの位置を調整しています。

この曲は、元々のハーモニーがすでに、メジャー7thコードなど、現在のソウル・バラードにも通じる深い響きを持っていたため、リハーモナイズと言ってもあまりいじらず、原曲のスコアを元にコード付けしました。また、メロディーの持つ深さを重視し、その音色はチェロで重厚に弾かせています。曲はこの後もマイナーに転調してより深遠さを増すのですが、誌面の都合上泣く泣く割愛してあります(いや、読者の皆さんにチャレンジするスペースを与えておきました!)

Ballad 70bpm

A

GM7 D/C Am7/D Em7 Em7/D

【基本パターン】

5

CM7 Am7 D7 GM7

【基本パターン】

9

CM7 F#m7(b5) Bm7

【基本パターン】

12

F#m7(b5) Bm7

【基本パターン (2小節)】

B

15

Am7(9) Am7/D

【ヴァリエーション 1】